トピックス

日本肥満学会主催 第２回肥満症サマーセミナー 特集〈その２〉

ワークショップ　肥満症Q＆A　＜その２＞

＊前号（Vol.11, No.1）に引き続き，今号でも第２回肥満症サマーセミナーワークショップ「肥満症Q&A」から興味深い討論を取り上げ，掲載いたします．

司会：本田　佳子（女子栄養大学栄養学部）

コメンテーター：石川　勝憲（市立伊丹病院）
大関　武彦（浜松医科大学小児科）
白井　厚治（東邦大学医学部臨床検査医学）
中村　正（大阪大学分子制御内科学）
宮崎　滋（東京逓信病院内科）
勝川　史憲（慶應大学スポーツ医学研究センター）

Q11：小児の肥満の診断基準について教えてください．また治療法についてもお示しください．

本田　小児期でのご質問ですが，成長過程での特質も含めて，大関先生，お願いいたします．

大関　日本で使用されています小児の肥満の診断基準には，標準体重に対する過体重度（肥満度），BMI，脂肪の量および分布があります．

肥満度とは標準体重に対して何％体重が増えているかということで，幼児期では＋15％，小児期では＋20％以上を一応の目安にします．

BMIは成人の場合では，肥満の基準を決める中心的な要素になっていますが，小児の場合は年齢によってその値が非常に変わりますので，そのまま使うわけにはいきません．そこで，BMIのパーセンタイル（percentile）値を基準にして評価することになっています．脂肪の量，分布はCTで測定したり，腹囲で測ったりして調べます．

治療法は，幼児期，小児期，思春期のそれぞれの年齢に応じて特質がありますので，それを一括して同じ治療法で行うのは大変難しいことです．それぞれの年齢に応じた対応を考えることが大切であるということと，小児の場合は家族，学校の先生方のような周囲の方々の協力，サポートが非常に重要になるという２点を治療の際にはお考えいただきたいと思っています．